

大洋州の国際協力の最前線から — 鹿大OBの経験 —

浜田 眞一

前JICAミクロネシア支所長

1. はじめに

浜田眞一と申します。鹿児島生まれの鹿児島育ち、鹿児島大学農学部林学科の卒業生です。昭和24年生まれ、昨年還暦を迎えた「いわゆる団塊の世代」です。今日はいわゆる「からいも標準語」でお話させていただきます。

私が本日この場にいる理由は、本年6月末までの3年間、大洋州の小さな島国ミクロネシアにいたことによります。JICA（独立行政法人国際協力機構）の現地事務所長をしておりました。在勤中、事務所のあるポンペイ島において、ここにおられる長嶋先生や富永先生に偶然お目にかかり、鹿児島大学の調査団とすることを知り鹿大卒業生としては「これは絶対お手伝いをしなければ」と思い、お付き合いが始まりました。

ミクロネシアからの帰国後、現在は福島県郡山市にある株式会社メディサンという「病院へ医療ガスを供給する業務を本業」とする会社で開発途上国からの医療機器管理分野のJICA研修員の受入業務を行っています。今月11日からはコンゴ民主共和国、ブルンジ、セネガルなどアフリカ仏語圏からの研修員を受け入れることになっています。

2. 国際協力への道

私が国際協力の道に進むことになったのは、鹿大時代に知った青年海外協力隊に参加したことによります。鹿大卒業後、会社を退職して、協力隊に参加、アフリカのケニアに測量隊員として昭和52年から3年と1ヶ月派遣されました。帰国後は、運良くJICAに中途採用され、以来、国際協力の仕事一筋でやって参りました。「国際協力の戦士 (International Co-operation Warrior)」を自認しています。

3. 国際協力の現場は危険がいっぱい

昭和55年（1980年）、JICAに入団してこれまで、職員として海外に勤務したのは、マレーシア（東マレーシア、ボルネオ島サバ州）、ソロモン諸島、それにミクロネシアの3ヶ国で、大きさは違いますが、すべて島です。ただ、出張などで行ったのは、経由国を含めると40ヶ国以上にもなります。

一般的に、国際協力事業は平和的な事業と思われるかもしれませんが、実は「危険がいっぱい」なのです。原因は、開発途上国の政治や経済の不安定性ですが、地震や台風（場所によっては、ハリケーン、サイクロンなどと呼ばれています）などの自然災害に遭遇することも少なくありません。

極め付きは、クーデターです。椰子の木陰でのんびりビールが飲めるといわれて赴任したソロモン（太平洋戦争において激戦の地ガダルカナル島は「飢餓のガ島」と呼ばれ、多くの兵隊さんが銃火に倒れ、マラリアで死亡した国です）ですが、忘れもしない2000年6月5日、クーデターが発生しました。もちろん、ある日突然クーデターが起きるはずはありません。予兆があり、1年半前から始まった部族間紛争（エスニックテンション）が拡大して、遂に首相官邸を襲撃したものです。幸い首相は殺されませんでした。ソ

ソロモンにいたボランティアは、日本以外にも、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、カナダなどがおり、それぞれ家財をぶんどって緊急避難したのです。現地責任者の私は、すぐには逃げられません。JICA関係者は私を含めて51名、隊員45名と調整員など50名を1週間かけて、主にオーストラリアに緊急避難させ、私は、自分のチャーターした10人乗りの双発機に大使と書記官の3人で平和な地方の島に避難しました。この島のノロという町には日本の「まるは」がソロモン大洋というカツオの缶詰工場をやっている、そのゲストハウスに転がり込んだのです。

幸い、首相が退陣し、オーストラリアとニュージーランドからの治安部隊が到着、クーデター軍を制圧、新しい政権が誕生して、一件落ち着となりました。

JICAと大使館は、ノロのゲストハウスに臨時のオフィスを開設しましたが、1ヶ月経過して、私はPNGから飛んできた36人乗りの双発ジェットに一人だけ乗り、PNGの主とポートモレスビーに脱出したのです。ところが、皆さんご承知のように、PNGは大洋州の中で最も危険な国なのです。PNGに4ヶ月も滞在した間に、色々な事件が発生しました。医療調整員（女性ですが）が朝の出勤途中のバス停でバッグを盗られそうになり、ナイフで手を怪我した事件やラスカルと呼ばれる山賊が銀行や商店などを襲撃する事件が頻発していました。クーデターでの避難先としては最悪だったと思っています。

このクーデターのお陰で、進行中のプロジェクトや計画中の案件は全てストップ、再開までは2年以上の歳月を必要としました。

私がクーデターを含め、首都ホニアラの治安状況が悪化をたどる中で考えていたことは、「悲観的に備えて、楽観的に対処せよ」と言う危機管理の常識です。いざクーデターが起きてしまえば、じたばたしても仕方がないのです。現場責任者の私がパニックになっては最悪です。そこでも思っていたことは、生まれ育った鹿児島での教育です。わが郷土鹿児島県の先人は多くの困難を乗り越え明治維新を成し遂げました。私は鹿児島県人としてクーデターという非常事態にどのように対処できるのか？ソロモンのクーデターと鹿児島県人はなんの関係もないのですが、なぜかそんなことを思っていました。クーデター発生日の6月5日から6月12日までの1週間、結果的に、一人の怪我人も落伍者も出さずに緊急国外退避のオペレーションができたのは、鹿児島県人としての県民性もあったと勝手に思っています。

4. 大洋州で思ったこと

大洋州では、この10年でソロモン諸島とミクロネシアにて勤務しましたが、同じような仕事をしていても、対応方法は全く異なっていました。ここにおられる方々は、それぞれ大洋州の専門家でご理解いただけたと思いますが、ソロモンとミクロネシアでは、よって立つところが違います。民俗学的や文化的背景、言語が異なっているばかりではなく、メンタリティが異なっていると感じています。一言でいえば、ソロモンはイギリス的なものであり、ミクロネシアはアメリカ的なものの違いです。ソロモンは英国を宗主国とする英連邦の一員であり、ミクロネシアは政治経済等アメリカに依存しています。この違いは大きいのです。

JICAの現地責任者としては、この違いを正しく理解した上で、ODA事業を展開しなければなりません。

5. 国際協力事業は人が命

長年携わってきた国際協力事業ですが、いつも思うことは、「事業を推進するのは人であり、事業の成否は人による」と言うことです。また、「ボランティア活動は、明るく、元気に、そして楽しく」とも言ってきました。

国際協力事業には、道路や橋を作ったり、水田畑作・植林などの事業もありますが、全て人が関わっています。JICAの各事業に携わっている人が現地の住民に与える影響は大きいのです。

ボランティア事業は人が中心の事業ですから、ボランティア自身の性格や行動が成果に直結しています。ですから、先に述べた「ボランティア活動は、明るく、元気に、そして楽しく」と言ったのは、朝、職場に出勤して現地のスタッフに暗い顔で「Good Morning」なんて言ったら、「お前病気か?」と言われるに違いありません。ボランティアには、「皆さんは、舞台に立つ役者ですから、大根役者でも構わないが、主演男優、主演女優として、役者に徹してください。」とお願いしてきました。2年間の役者を立派に演じてもらいたいからです。結果は自ずからついて来ます。暗い2年間では、誰も活動を評価してくれません。これは、自分自身の経験から得た教訓でもあります。

6. ミクロネシアにおける鹿児島大学卒業生の活躍

大洋州の小さな島国ミクロネシアに、なんと3名もの鹿児島大学の卒業生が国際協力に従事していました。私以外に、左近充浩一さんと言う水産学部卒業で、海外漁業協力財団(OFCF)の現地責任者、所長をしている人です。ミクロネシアは水産業が盛んですが、零細漁民は沢山いますが、現地水産企業は皆無です。中国や韓国、日本などからマグロを求めて漁船がやってきます。獲れたマグロは専用ジェット機で主に日本に運ばれています。OFCFは、日本の水産行政の前線基地として重要な役割を果たしています。

もう一人は、伊藤正弘という、College of Micronesia現地の最高学府ミクロネシア短期大学で、黒真珠プロジェクト責任者をしている人です。真珠を扱っていることから、ついたあだ名が「パール伊藤」と言う訳です。ミクロネシアには地場産業がほとんどありません。ポンペイ胡椒は結構有名ですが、零細規模です。ミクロネシアの黒真珠は全くの天然で、品質はタヒチに比べても遜色はないのですが、如何せん知名度がありません。それにビジネスになる量がまとまっていません。やっと、売り出せるまでに成長した段階です。パール伊藤さんの汗と涙の努力に共感した島民の協力もあり、自立への道を少しずつ歩み始めています。

鹿児島大学卒業生も3人寄ればいろいろなことができるもので、農学部出身の私も水産には相当に肩入れしていました。パール伊藤さんのプロジェクトには養殖の隊員を派遣していましたし、今年6月の帰国前に開催された黒真珠の販売会では、特別価格だったこともあり、相当の金額をはたいて買いました。

また、私の後任は東京水産大学出身(現在は東京海洋大学と言うようです)のJICA職員OBで、神奈川県にあったJICA水産センター所長も経験した方ですので、より強力な助っ人の登場で、左近充さんやパール伊藤さんは更にパワーアップして、ミクロネシアの水産界は益々発展していくことが期待されています。

蛇足ですが、ケニアの隊員時代にも、4名の鹿児島大学出身者がいました。1977年(昭和52年)当時、隊員75名中の4名ですから、一大勢力です。4名共に農学部出身で、私は林学科卒の測量隊員、後の3人は農学科卒の稲作と野菜栽培の農業隊員でした。隊員の歓迎会や送別会では、七校寮歌の「北辰斜め」をよく歌ったものです。まさにあれは、青春の1ページでした。

7. まとめ

最後に、国際協力事業は日本の国民の皆様方にまだまだ理解されていないということです。ボランティア事業は歴史的な経緯から、45年経過した今では、国内の知名度は大きく、シニアボランティアが誕生するまでに拡大発展しましたが、無償協力や研修員受

入事業など多くのJICA事業の評価はそれほど高くありません。

特に、昨年民主党政権誕生後に行われた「事業仕分け」では、厳しい評価を受けました。民主党が標榜する「コンクリートから人へ」と言うのは、まさにその通りだと思うのですが、無償で橋や道路を建設することを無駄といい、青年海外協力隊員をニートの集団などと言うに至っては、「正気か?」と疑いたくなります。確かにODAは自民党政権下で拡大発展、バブルがはじけて以降、世界第一のドナー国から転落して、いまや中国にも抜かれて世界第5位。人材資源は豊富でも、石油や農産物などの資源の少ない日本が世界で生き残るには、国家戦略を持ってODAを推進していくことだと思うのですが、国内経済の厳しい現状では、望むべくもないのかもしれない。

世界の開発途上国では、まだまだ生活関連インフラが整備されていない国が多く、病院もなく、死んでいく人々が多くいます。人の協力だけでは、死に行く人を見守るしかない現状もあるのです。

世界は広く、大洋州のように、小さくても日本の助けを求めている多くの島嶼国があり、アフリカには飢餓や内乱等で苦しむ多くの人々がいます。

日本は、それらの国々、人々のために何かをなすべきです。平成維新などと大それたことは言いませんが、21世紀に生きる我々は、自分のことだけを考えるのではなく、世界に目を向けて生きていかなければならないと思います。「跳ばかい、泣こかい、泣くよりひっ跳べ」と鹿児島の人々が言ったように、日本国内はもとより、海外に向けて活動の場を広げるべきなのです。

The Front Line of International Co-operation in the Pacific Islands

- The Experience of a Kagoshima University Graduate

HAMADA Shinichi

the former Resident Representative of JICA Micronesia Office

1. Self-introduction

I was born in Kagoshima, and graduated from Kagoshima University, Faculty of Agriculture, Forestry Department. For the last 3 years until the end of June, I was in the Federated of Micronesia as Resident Representative of JICA Micronesia Office. And now I am working for a private company, Medisun, located in Fukushima prefecture.

2. Road to International Co-operation

In 1977, I was dispatched to Kenya as a JOCV Volunteer. This voluntary activity was my starting point for International co-operation. After Kenya, I found employment with JICA.

3. International Corporation is Not So Safety

I worked for JICA for 30 years, and served in Malaysia, Solomon Islands and FSM as a JICA staff member. But altogether my work took me to all more than 40 countries including stop-overs. Generally speaking, International Co-operation is a safe job, but in fact there are lot of dangers. The reasons why I say it is so dangerous are the political and economic situations of developing countries. In June 2000, I experienced a coup d'etat in Solomon Islands.

4. Human Resource is the Most Important for International Corporation

All jobs must be done by human beings. All people engaged in international co-operation activities have to be humble and faithful. The key is very simple: that is, "For the people and for the nation of developing countries." I always say that JOCV volunteers must be cheerful, healthy and happy. If the people engaged in international co-operation activities is not like JOCV volunteers, their results and achievements are not so high.

5. Kagoshima University Graduates in FSM

FSM is a country of small islands, but there are three Kagoshima University graduates. It's so great. Mr. SAKONJU Koichi is R.R of the Overseas Fishery Cooperation Foundation of Japan (OFCF), and Professor ITO is the pearl project manager of COM landgrant project. They graduated from the Faculty of Fisheries.

6. My Point of View

The Pacific is too wide. Pacific countries are very many and very diverse. Therefore, we can't consider them all the same. Each country has its own culture and life-style. We should respect these countries and their people.